

2.44mM/Lとなり以後わずかに上昇する傾向が見られたが有意ではない。帝切群では変化の少ない傾向にあると思われる。

焦性ブドウ酸値は母体静脈血 0.229mM/L、臍帶動脈血 0.382mM/L、臍帯静脈血 0.332 mM/L、出生後は1及び2時間に各々 0.183, 0.169mM/Lと低値をとる傾向がみられた。

過剰乳酸については我々は Hackabee の方法により同一血管即ち臍帯静脈血より算定を試みたが正常経産群中にも出生後15分に高値を示したものがある。

以上我々は分娩現象が胎児及び新生児に与える影響を糖代謝の面より正常経産分娩及び選択的帝切例について検討しこれらの変動は2時間を軸として平定化する傾向にあると考える。

質問

(九州大) 木村 制哉

乳酸・焦性ブドウ酸定量時に同時に pH の測定をしたか。

答弁

(東京日立) 柳 玄彦

pH, 有機酸, Apgar を平行して測定している。

追加

(東京大) 藤井 仁

われわれは臍帶血の pH, Lactate 値, Pyruvate 値, ならびに Apgar score, 羊水 こんだくなどの関係について検討している。簡単に成績をのべると, 臍動脈血

(UA) pH 値を 0.05 毎に区分し検討したところ, pH 7.25 以上の例では U.A. lactate (UAL) 37.9mg%, U.A. pyruvate (UAP) 0.9mg% であり, pH 7.150~7.100 群の値は 4.5, 1.3 と漸増の傾向があり, pH 7.100 以下になるとそれぞれ 77.5, 1.6 と有意の差をもつて増加している。pH の低下につれて Apgar score の異常値, 羊水 こんだくの出現頻度の増加などの臨床的所見の異常も多発した。

82. 新生児期血液成分の変動、特に臍帯動脈静脈血間の性状差について

(済生会新潟総合) ○ 笹川 重男, 阿部 進

成熟新生児血液諸成分を、臍帯動脈 (A), 臍帯静脈 (V) からそれぞれ採血し、また生後 1, 3, 6 日目に検査して報告した。好塩基球数は稻垣の直接算定法により、淋巴球の PAS 陽性率は Hayhoe の変法を用いた。

赤血球数は A.V. および生後推計学的に優位な変動はない。血色素量も 15 g/dl 前後で生後も大きな差はなかった。ヘマトクリット値は 48% 前後であつた。MCH は 30~40 で高色素性、MCV は 100~150 μ^3 と大赤血球性で、MCHC はほど成人のそれと似て居た。網赤血球は

A V 共に 3% 前後で 6 日目にやや減少した。白血球数は A V 共 10000/mm³ 前後で差なく 3 日目で既に優位に減少した。分類では A V で 淋巴球が比較的多い。好塩基球数は、A で 41.1/mm³ V で 39.5/mm³ と成人に対し比較的多く、また妊娠末期および分娩第一期婦人に比較して著明に多かつた。3 日目は 1 日目に比し優位に減少した。血清コレステロール値は A V 共 成人に対し低く、以後優位に増加する。アルカリファスファターゼ値は 15 KA 前後で以後も一定の変動はない。血清蛋白は A V で差なく以後も大きな変動は見られない。A/G は A V 共に 2.26 で 3 日目に優位に低下した。Al は A V 間に差はないが生後優位に減少して行く。gl では α^1 は変動しないが α_2 および β は生後 1 日目より 3 日目で優位に増加した。 γ -gl は A V 間に差なく、1 日目、3 日目で減少した。ビリルビンは A で 1.75 mg/dl, V で 1.58 mg/dl であつたが推計学的に優位差は見られなかつた。勿論生後上昇した。

GOT は A V で多くは 10~20 単位、GPT は A V で 0~10 単位の間にあり何れも生後変動は優位でなかつた。K は A V で 3~4 mEq/l, Na は 120~145 mEq/l の間にあつた。PAS 陽性淋巴球は A で 21.95%, V で 24.0% で生後 1 日目で減少、3, 6 日目で漸増した。骨髓中淋巴球様細胞の陽性率は末梢血に比し低く、同様に逐日的に増加した。

以上の結果に若干の考察を加えて発表した。細部については以下更に検討中である。

質問

(兵庫・神鋼) 中村 隆一

新生児血液は非常に溶血が多いと思われるがその処置についてどのように取扱われたか。

答弁

(済生会新潟総合) 笹川 重男

わたくしたちはヘマトクリット管で遠沈後の上清を肉眼的に判定し、溶血のあるものはのぞいた。

なお溶血に関し、現在赤血球抵抗をしらべているので追つて発表したい。

83. RH 隆性妊婦と羊水分析について

(大阪・淀川キリスト教)

○ 河辺 敬三, 王 春雄, 笠井 貞夫

田川 哲生, 合瀬 徹, 鶴原 常夫

荒木 正義, 上野 成子

昭和32年より本年10月迄に RH 隆性産婦 182例を取り扱つたが、抗 D 抗体上昇初産婦 8 例、経産婦 36 例、抗 E 抗体 1 例に、抗体と児の予後につき検討を加えた。更に RH 隆性 28 例に計 60 回の羊水穿刺を行ない比較検討した。そのうち 14 例は輸血、重症黄疸等による脳性麻痺も